第385号 昭和52年7月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和52年（1977年）
7月号（No. 385）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

ルーム基金募集のお願い
（西堀栄三郎）……（1）
ナンダ・デヴィ登山隊会計報告
（ナンダ・デヴィ委員会）…（2）
山を歩く
5月の屋久島宮之浦岳
（野口秋人，木本善重）……（3）
アフリカひとり旅
――ケニヤ，キリマンジヤロの交通事情――（梅野淑子）……（4）
一つの提言
日本山岳会総会に思う
（佐藤テル）……（5）
図書紹介……（5）～（7）
『北の山続編』を読んで
（山口健児）
『グリンデル ヴァルトの山案内人』
（宮下啓三）
『山を見る日』
（望月達夫）
自然保護情報
ブナの原生林を守ろう
（高橋亨夫）……（9）
報告とお知らせ……（7）～（9）
復活・新入会員，住所・住居表示変更……（10）
会務報告，ルーム日誌……（11）

カット／松本慎太郎・谷アユ子

●わたしたちのルームをわたしたちの手で!!

# ルーム基金募集のお願い

会長
募金委員長　西堀栄三郎

本会が戦後、焦土のなかから立ち上って、会員からの浄財を基に、旧岸体育館の敷地に自前のクラブルームを建設したのは、昭和二十四年三月でありました。戦後いち早く復旧したクラブルームと図書室とは、爾来本会発展のため多大の貢献をしましたが、昭和三十九年体協の移転に際し、右の土地は当初の約束通り体協に返還することとなり、本会も外苑コーポビルの一室に移転の已むなきに至りました。その後ルームは向井ビル、さくらビルとかわって現在におよんでいるのは、ご承知の通りですが、すべて借室であります。

しかしながら、最近の物価高騰に伴い家賃も年をおって上昇し、今後ともこの傾向は続くものと予想せざるをえません。会費収入を主たる財源とする本会の財政にとって、家賃支出は少なからぬ負担となっております。そこで会は一昨年来理事会、委員会等で検討をかさねた結果、どうしても自前のルームを持つべきであり、その方が将来の会の財政にとっても遥かに有利であるという結論に達しました。そして今年の通常会員総会で、ルーム取得のために必要なすべての議案に賛成のご承認を得ることができたことは、本誌前々号記載の通りです。すなわち所要資金（後記ご参照）中、長期借入金の返済は現在の年間支払家賃とほぼ同額をもって、十数年で完済する予定でありますから、その点で年間の会の収支を圧迫することにはなりません。差額の二千万円については会員から一千万円、会員外（主として法人）から一千万円のご寄附を仰ぎたい計画であります。

よって会員各位にたいし、時節柄なはだご迷惑とは存じますが、本会の永い歴史と、その将来の発展のためルーム並びに図書室がいかに大切であるかをご賢察の上、この募金にすすんで応じられますよう、衷心懇願する次第です。このことは既に別便をもって全会員各位に詳細お願い致しましたが、目的達成の徹底を期するため、ここに概要を述べ、絶大なご協力ご援助を賜りたく重ねてお願い申上げる次第であります。

**●新ルームの概要**

名称「サンビューハイツ四番町」（住宅用マンション）

場所　千代田区四番町五番四（国電市ガ谷駅徒歩七分地下鉄有楽町線麹町駅徒歩六分）

スペース　一階一六四・三五平方米（約五十坪）本会専用の出入口附

**(1)所要資金**　八〇、〇〇〇千円

内訳

| | |
|---|---|
| 買取資金 | 七、〇〇〇〇千円 |
| 図書室整備費 | 三、〇〇〇千円 |
| 内装費等 | 三、〇〇〇千円 |
| 引越費用等 | 三、〇〇〇千円 |
| 募金事務費その他 | 一、〇〇〇千円 |

**(2)調達方法**

会の自己資金

| | |
|---|---|
| 長期借入金 | 五、〇〇〇千円 |
| 会員及び会員外からの募金 | |
| 計 | 二〇、〇〇〇千円 |
| | 八〇、〇〇〇千円 |

**(3)会員各位からの募金目標額**　一〇、〇〇〇千円

**(4)募金方法**

会員の寄付金は

(イ)東京都、神奈川、埼玉、千葉各県に在住される会員　一口金一万円

(ロ)その他の地域に在住される会員　一口金五千円

(イ)、(ロ)とも分割払込みをお受けします。

**(5)募金申込み期限**　昭和52年10月末日

**(6)募金払込み期限**　昭和53年6月末日

**(7)振込先**

・三和銀行本郷支店　普三五一―三七六一二

・協和銀行神田支店　普一二六―五七四五九三

・東京銀行本店　普〇〇一―一二五一〇五

・中央信託銀行本店　普〇一一―一二四九〇五

・郵便振替口座　東京三―四八二九

いずれも名儀は日本山岳会。

**山をきれいにゴミは持ち帰ろう**

# ナンダ・デヴィ登山隊会計報告

## ナンダ・デヴィ委員会

内外の皆様のご協力により実行いたしました、日印合同ナンダ・デヴィ縦走登山については、その成功の模様は隊長の鹿野勝彦が会報（三七四号）に報告を書いておりますので、お読みいただいた通りであります。

登山隊出発後一年を経過したにもかかわらず、収支決算については、未報告になっておりましたが、このほど遅ればせながら、別表の通り収支計算書がまとまりましたので、ご報告いたします。

実行予算三〇八八万円に収入は未達でありましたが、経済環境が悪い中で、内外とも予想を越えたご芳志をいただきました。特に計画推進のポイントである会員各位のご援助は、予想の二倍近くに達しました。これは会員各位のナンダ・デヴィ縦走に対するご理解のたまものと思います。協力者ご芳名を左記に掲げ、お礼申しあげます。一方支出は、彼地の情勢がわからない中を、事務局一同経済環境を良く認識して、支出の圧縮につとめ、計画を達成した上に、予算外の十六ミリ映画一巻、カラースライド一組（百枚）を作成し、山岳会ライブラリーに寄贈することが出来ました。

残務は公式報告書の編集発行だけでありますが、これも七月末発行を目途に、一同取組んでおります。発行の見通しがつきしだい、会報に案内を掲載するつもりであります。多数の方がお読み下さるよう予めお願いいたします。

終りにご協力いただきました皆様に重ねて感謝申しあげます。

（堀内章雄）

**収支計算書**（昭和52年3月1日現在）

**1. 収入**

| | | |
|---|---|---|
| 隊員負担金 | | 10,400,000 |
| 個人寄付金 | 会員 | 1,841,158 |
| | 一般 | 379,000 |
| | 小計 | 2,220,158 |
| 法人・団体寄付金 | 会社 | 7,891,000 |
| | その他団体 | 4,327,000 |
| | 小計 | 12,218,000 |
| 雑収入 | | 358,394 |
| 計 | | 25,196,552 |
| インド側負担金 | | 3,222,454 |
| 合計 | | 28,419,006 |

**2. 支出**

| 区分 / 費目 | 国内費 | 国外費 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 渡航費 | 2,351,282 | — | 2,351,282 |
| 滞在費 | — | 1,625,265 | 1,625,265 |
| 輸送費 | 1,339,170 | 4,784,070 | 6,123,240 |
| 装備費 | 2,873,228 | 3,192,147 | 6,065,375 |
| 食糧費 | 344,901 | 528,657 | 873,558 |
| 人件費 | — | 4,098,262 | 4,098,262 |
| 医・薬品費 | 50,000 | 228,814 | 278,814 |
| 写真・材料費 | 1,077,045 | — | 1,077,045 |
| 梱包費 | 337,775 | 0 | 337,775 |
| 酸素費 | 0 | 0 | 0 |
| 保険料 | 216,690 | 54,596 | 271,286 |
| 調査費 | 303,360 | — | 303,360 |
| 事務費 | 1,558,965 | 506,375 | 2,065,340 |
| 報告書出版費 | 2,948,404 | — | 2,948,404 |
| 合計 | 13,400,820 | 15,018,186 | 28,419,006 |

**協力者ご芳名**（順不同、敬称略）

梅本霊邦、三田幸夫、高遠宏、片岡博、沢村幸蔵、大塚武、加治甚吾、坂口三郎、小倉厚、寺村栄一、野口秋人、岩崎三郎、柴田均二、鈴木清、山口清秀、深田志げ子、原蕃、秋山宏明、穴田雪江、今井喜美子、金山淳二、川村旭、神原忠夫、木村勝久、久保孝一郎、河野幾雄、向後元彦、向後紀代美、小林重一、佐藤佳年、坂倉登喜子、柴田厳太郎、島尾智恵子、島尾久子、菅野時子、鈴木昭、田村扇一、茶谷東海、中野征紀、平山武志、松本節子、宮下啓三、柳宏子、笠原潤二郎、山口節子、須田紀子、吉沢一郎、川崎吉蔵、金坂一郎、小林幹三郎、近藤裕、杉山孝、中原万次郎、川崎精雄、平野隆司、大森久雄、横山厚夫、島田巽、錦織英夫、小林猛臣、中川恵資、中保、浜田一馬、清水春美、藤井運平、小倉董子、町俊一、小島六郎、渡辺誠司、工楽英司、見学玄、武藤晃、河村英二、薬師義美、板倉勝正、砂田定夫、林和夫、浜野吉生、望月達夫、千谷壮之助、東原進、木下是雄、立見辰雄、辰沼広吉、風見武秀、高本信子、小田和友蔵、高山忠四朗、石塚計一、竹節作太、尾崎徳郎、藤山愛一郎、山田二郎、加納一郎、斉藤純一、安間荘、牧野文子、伊藤洋平、大森弘一郎、酒井吉国、山口健児、日下部憲、植村直己、名須川浩、日高信六郎、黒石恒、織田信彦、粕谷孝則、清水清二、中島道郎、安藤千年、加藤泰安、豊島義明、三戸田一郎、福島健一、戸張陞、今西寿雄、清田清、川井ヨシノ、森川洋佑、岡沢祐吉、斉藤健治、浜口欣一、F・マライニ、塩田良仲、中村進、浅輪幸久、早川種三、田口二郎、山口一孝、宮下秀樹、井口邦利、川森左智子、飯塚誠一、辻荘一、神崎忠男、宮崎紘一、相山元良、菅野弘章、森本勲夫、大田譲治、渕博美、白井厚子、三好勝彦、池田智津子、春田俊郎、竹田寛次、水野祥太郎、森田鉄郎、渡辺徳、鈴木淳平、斉藤惇生、佐藤テル、大貫良夫、前田浩、川上隆、村岡利夫、野村哲也、富田美知子、北村嘉鶴子、北島光子、村山雅美、武田満子、今西錦司、江藤秀一、山野井武夫、藤井信、柳沼シゲ子、小倉茂暉、奈須文枝、田辺言計、大沢伊三郎、山崎安治、三枝礼子、市橋隆二、小栗嘉治、中世古隆司、荻須昭大、浅井修二、梅田浩生、堀田弥一、平山善吉、近藤信行、山本良三、広瀬政美、広島三朗、越田和男、橋本正明、浅田治男、加藤勝義、浜野正男、大倉昌身、古畑勇、鈴木実、松田アキラ、小原佑一、折井健一、大塚博美、津田周二、田部節雄、久保田保雄、西沢健一、田山勝、橋本清、中島寛、松田雄一、松田柳子、市村章弘、高橋定昌、鳥居亮、斉藤桂、権藤太郎、百瀬舜太郎、中沢仁、安彦六郎、林稔、小池恭弘、松丸秀夫、中島正夫、交野武一、槙有恒、鹿野勝彦、梶正彦、重広恒夫、長谷川良典、堀内章雄、伊丹紹泰、渡辺兵力、小原俊、小林政志、関章司、桐生恒治、磯野剛太、寺本正史、加藤保男、高見和成、東京理大Ⅰ部山岳部、東京電機大Ⅱ部山岳部、東大スキー山岳部、明大炉辺会、学習院大輔仁会山岳部、福島支部、越後支部、石川支部、静岡支部、学生部、集会委員会、以上二八七名。

山を歩く

# 五月の屋久島宮之浦岳

野口秋人
木本善重

標高一二八〇メートルの淀川小舎は二室に分れたしょうしゃな山小舎だった。私たち一行六人は二階の寝室にそれぞれスリーピングバッグをしいて、ねぐらの準備をした。小舎までの山道の両側にはツゲの木に混じって大小無数のヤクシマ石楠の苗が一面に生えていた。小舎から二〇メートルも下ると淀川が透明な水をたたえてゆっくり流れている。一〇メートルほどの川幅のある川床は床から両岸まで真白な花崗岩で、その水面にハイビャクシンや石楠の枝が影をおとしてこの上ない清潔な感じをかもし出していた。私たちは早速川の水をすくって飲んでみた。癖のない美味しい味だった。周りは杉を主としてモミ、カシ、タブノキ、モチノキの大木がおいしげり、その下にはツゲ、石楠、スギの苗が群生して小舎の前庭から空を眺めても、空間はわずかしかなかった。

小舎の横のひと抱えほどの折れた杉の幹に生えたヒカゲツツジの黄色い花は、唯一の色どりとしてホッとしたやすらぎを与えてくれる。車をすてて淀川小舎までの三五分間ほどのゆるやかな山道はすべてうっそうたる大木でおおわれ、日の光も十分にささない森林は亜熱帯性多雨地帯の特色で、この高度のわが国の山では見られない風景である。

少しの凹みがあると水が湧き出て苔が生え、セキコク、フウラン、ナゴランなどの寄生植物が繁茂し、それがいっそう屋久杉の大きさを引きたてていた。上高地の両岸の明るさと全く対照的である。あとからわかったことだが、全山の沢という沢は昼なお暗い森林でおおわれているのである。小舎の対岸の淀川べりの木々の緑の複雑な変化に圧倒されて、ぼんやり眺めているうちに雲がだんだん拡がってきた。

夕飯の仕度をする頃から雲が低くなり、六時頃からポツポツとおちてきた。案内役のリーダー諸君の作ってくれたおいしい夕食を食べ終った頃には、雨脚は次第にひどくなり、夜に入って本格的な降りになった。午後四時と十時とのラジオの天気予報をもとに若い両君が苦心して作ってくれた天気図によると、屋久島上空に低気圧が通過の予定で、明十六日の朝までは晴れないだろうとの結果がでた。ともかく、一応明朝は六時に出発の用意をして寝についた。朝起きてみても、雨脚は依然強く、晴れる気配は全くない。八時まで様子をみたが雨の音は強くなるばかり、一歩小舎の外へ出るとズブぬれになるていたらくなので朝食を食べて様子をみることに衆議一決、バッグにもぐりこんでそれぞれ話の種を探す。

屋久島は昔から山岳信仰の風習があり登山がなかなか盛んである由、全島民一万七千人のうちアクチブな山岳会員は五十人居られる由、羨ましい限りである。また小舎の設備をよくして登山客を多く招致すると山の原始林が破壊されるとの懸念で登山道も余り整備せぬ由、一つは屋久杉の濫伐で原始林が少なくなってゆく現状を憂えてのことと思われる。その夜二時におきてみると月夜だった。

翌十七日は快晴、六時三十分出発、淀川の吊橋を渡って対岸へ出、急坂を上って尾根道へ出る。昨日の雨に洗われて木の葉がみずみずしく光っている。歩きやすい山道を上って一時間半余で花之江河につく。途中屋久杉の白い立ち枯れが目立つ。花之江河の湿原は花の季節には少し早く新緑がまぶしく目にしみる。鹿にも人間にもよい泊り場を提供してくれるわけである。右小杉谷、左栗生への分岐点の標柱も頼もしい。これより道は上りとなり、黒味岳、なげし岳、翁岳、栗生岳の裾をまいて宮之浦岳に向う。途中はアセビ、石楠、ヤク笹、コイワカガミの群落がいたるところに現われ足の踏み場もないくらい。そろそろ頭の上に太陽が輝きはじめる。途中なげし平で登山者十五人ほどに会う。昨夜の豪雨にテントの水漏れが激しかった由。正午前ヤク笹を通りぬけて宮之浦岳（一九三五メートル）に着く。

この辺りの岩峰はすべて花崗岩の露頭があるため風化による奇岩が多い。頂上からの展望はすばらしい。丸い屋久島の山々は一望の中にあった。特に南の七五岳（一四九二メートル）の四〇〇メートルの岩壁は目立った。すぐ前の永田岳（一八九〇メートル）を望む位置で昼食をとる。屋久島はすべて頂上が流れ出て山全体がシットリとしてたいへん気持がよい。地元の山岳会のリーダー諸君と同行して、みちみち屋久島の面白い話をきくことができてはなはだ有益であった。

これから、宮之浦岳から高塚岳への尾根道を通って高塚小舎経由、小杉谷へ下らねばならない。頂上から北側の斜面を下って宮之浦岳の北面の山はだの浅黄がかった柔らかい緑の毛せんのような調和のとれたヤク笹の群落に見入りながら、約三〇分下ったところで鹿が水を飲んでいるのを四〇〇メートルほど先に望見した。大きな声を出して呼んでもおどろく気配もない。途中平岩からの尾根道は木の根がはびこりすこぶる歩きにくい。尾根の末端高塚避難小舎一三九六メートルに着いたのは宮之浦岳を後にしてから三時間半をすぎていた。ここからは樹林帯の大木の間をのりこえる道となり、小さい高低のある道を木の根をふみこえて進む。太陽は照っているはずなのに樹令千年をこえる屋久杉の密林が空をおおっているためうす暗いところが多く、たまに空が見えると明るくなってほっとする。縄文杉（推定樹令七千年）、大王杉等の巨木の側を通りながら尾根道を下りきって平坦な道へ出た時は七時近かった。明るいうちに下りおえたのは幸いだった。乗り物の便を得て宮之浦に着いた時は九時をすぎていた。

（今回の登山には地元の荒木氏、若松氏、山岳会の榎、真辺の両氏に多大の便宜をはかっていただいた。深甚の謝意を表する次第である。屋久島へは航空便、船便ともに最近は便利になっているのは幸いだった。）

（一九七六、六、一）

# アフリカひとり旅

## ——ケニヤ、キリマンジャロの交通事情——

梅野淑子

最近は団体でこれらの山へ登るくらいだからいまさらでもないと思うが、私のように一人で充分な調査もなくぶらりと出かけようなんて人もいるかも知れないので、最近私の経験したことを書いてみたい。

先にケニヤ山へ行ったのだが、キリマンジャロの方がナイロビから遠いし国境もあるから、まず調べておこうと、ナイロビに着いた日、早速街へ出た。モシまではバスがあり、その先はまた小さな乗合バスに乗ればよいと、前行った人から聞いていたが、バス会社の名がはっきりしない。地元の日本人に聞くと、大体バスを乗りついで国境を越えるのは感心しないという。これは日本の大使館でもビザをとる時いわれた。町で何人もの人に聞いたがわからないので、結局タクシーでやっとイースト・アフリカン・ロードサービスという所に行く。バスはいまモシまで行かず国境のナマンガまで、先はまた何かあるだろうとのこと。へんなとこで降ろされて先がなかったらと不安になる。なにぶん着いた日のこと、この汚いターミナルを見てとてもこんなバスで行く気になれないと思った。

翌日ケニヤ山へ行く。麓のナロモルまで地図上は鉄道もあるが走ってない。ロッジのパンフレットに飛行機かタクシーでと電話がでてたので午後のをたのんだ。乗合いだが予約は私だけらしく、裏町のある一角を一時間近くナンユキ、ナンユキ（ナロモルの先の町名）といいながら廻る。始めはいらいらして私が三、四人分出すから早く出てといいたくなるのをがまんする。途中の町で人が下りるとまた際限のないぐるぐる。暗くなってきたから一体いつ着くのというと、あと一時間ぐらいだという。真暗になった。帰りはどうなるのかな。ロッジで聞いたら表通りまで送るからタクシーをひろえという。何でもいいから手を上げたら止った。乗れというが中は人が一杯。乗れないじゃないといったが乗れという。奥に座ってた人が立ち、皆がつめると最後に乗った私が座れるというわけ。誰一人文句をいわない。その車は途中までだったが、自動的に私の荷物はナイロビ行きの他の車に積まれた。ひとしきりぐるぐるをやって、いやになる頃発車。後で知ったが普通のバスもこれをやる。こちらはちょっと前へ出たり下ったり、たっぷり一時間。満員近い車を探して乗るべきだ。でも車があればよい方で、後で行った国など車不足で何時になったらつかまるのか予想もつかない。

さてキリマンジャロへ行かなくちゃ。これだけサファリ会社があるのだから一台ぐらいそっちの方へ行く車がないかと軒並あたってみたが、ない。飛行機は日曜だけとのこと。鉄道でボイ経由で行こうと、幸い予約できたので一日一本しかない夜行に乗る。朝四時、真暗なボイで降ろされる。この先レールはあるが汽車がない。バスは十時だから六時間もある。蚊がぶんぶんする暗い駅に皆とごろ寝。お腹まで痛くなりマラリアとコレラの不安。明るくなるとレンガの素敵な駅舎にほっとする。バス停でゆっくり待つ。待つことになれて来た。十時半バスに乗り国境で両国の検査を受け、ヒモで小さなバスに乗りかえマランゲに着く。

登山を終え、私はダルエスサラームへ行きたい。モシのターミナルへ行くと、今日は満員だから明朝早く来いという。時間つぶしに二時間程のアルーシャへ行く。例のなかなか出ないバス。時刻表などなく、出る時は二台続いて不経済。アルーシャはダルエス行きの始発だがここも満員とのことで、この町に泊り朝早くターミナルに行くと、朝着くはずの車がまだなので予約出来ないという。そんなの困るとねばると、十二時に来れば十二時半のに乗せてやるという。この他五時、夜の八時の三本である。十二時に行くとやっと予約出来たもののバスが来ない。三時すぎやっと来てすぐ発車。やれやれと思う間もなく一時間も行かないうち動かなくなった。約一時間、皆で押したりしたが駄目、運転手もあきらめてしまう。かわりでも来るのかと待つこと三時間。運転手に聞くとかわりはないからあきらめろという。

冗談じゃない、私は予定がぎっしりで今夜出ないと最後には日本にも帰れなくなるというと、ではアルーシャに戻り夜のバスに乗せてもらえという。すぐ通りかかった車で引き返すと予約の時の太っちょの小父さんが、どうしたという。事故を知らないの、四時間もたってるのに、夜のにぜひ乗せてと待ったがキャンセルがなく駄目だという。立ってでも行くからぜひとがんばると、車に乗ってた日本人を連れて来た。この人、朝予約に来てた在留邦人で、この人のスワヒリ語の通訳によると法律で立って行くのは禁じられている、現に途中で降ろされた人を見ているとのこと。法律を出されると弱いがこちらも必死、そこを何とか、だいたい会社の事故なのだから何とか考えてくれてもというと、そんな日本的な考えは捨てるべきだと今度は邦人がいう。モシまで乗って行け、そこからさっきの車が動くかも知れないという。そんなことあるものかと思うが、ここにもいられないので乗る。事故の車は案の定暗闇の中に人ともにいた。私もモシで残酷にも降ろされる。それでも迎えの車が行ったからそれが今夜出るかも知れないと告げられる。もうあてにしてないと答え、コンクリートの上に寝ようかと用意を始めたら、すごい音がしてバスが来た。皆が走って行くので私も行ってみるとダルエス行きとのこと、夢かととび乗る。さっきの車の乗客がわーいと迎えてくれた。私ははずかしかった。それから発車まではまだごたごたがあり、動き出したのは夜中の十二時。本当はひるの十二時半発の車である。そして夜中走り続け、ダルエスに着いたのは翌日ひるすぎだった。私は前日ホテルで朝食を食べたきりなのを思い出す。他の乗客とて同じようなもの。運転手も大変だったろう。

私の旅はこの後も困難がつづくのだが、山から離れるからこのくらいにしたい。

なお、ちょっとお金のことにふれると、タンザニアでは銀行でも一〇〇ドル紙幣を扱わないこと。

またケニヤのお金の国外持出しは一〇〇シリングまでで、私も出国の時は一生懸命それ以下にしたのにふたたび入る時ついうっかり、ウガンダから乗った小型飛行機が予期しない国境の町にぴゅーんと下りて、いきなりケニヤマネー出せと来た。かくすひまもあらばこそ、持ってた三枚出すと二枚ぱっと取り上げたので思わずドロボーというと一枚返してやるから黙ってろと、一枚まんまとポケットに入れられてしまった。

## 図書紹介

# 『北の山続編』を読んで

山田健児

北海道の山岳といえば、伊藤秀五郎君の名著『北の山』を想い出す人が多い。この本は大正の末期から昭和の初めにかけて、まだ原始的な詩情溢れる北海道の自然の中に、静かに溶けこんでいた頃の彼の記録である。

近代登山の黎明期に、雪と氷に閉された多くの未知の領域の存在を見つけ、狂喜して山の懐深く跳びこんで行った者は、彼も含めて大勢いたけれども、彼ほど感受性と、文才を具えたものは一人もいなかった。

ただ、我武者らに登りまくる連中にとっては、彼が克明に書き残す記録こそ、まことに有難いものであった。

また、暗い沢登りや、籔漕ぎのような原初的な山歩きと、針葉樹林の軽い粉雪に憧憬をもつ日本中の岳人達は、彼の『北の山』を読んで北海道を訪れ、山々の荒削りで粗野な感触を十分に味い、満足して帰って行ったことであろう。

彼、伊藤秀五郎君は横浜に生れ、中学を終えるや、直ちに北大の予科に入学した。それ以来、北海道の天地に魅せられてしまったのか、すっかり根を下してしまい、専門の生物学研鑽のかたわら、山を愛する自然人としての生活を楽しみ、北海道を出てもすぐまた戻ってしまい、ついに終焉の地と定めてしまったのである。

このたび、『北の山続編』が茗渓堂より刊行された。彼はこの出版に備えて、旧稿をいろいろ整理していたらしく、北海道の登山史として、大雪山その他、中央高地の記録を纏めているからと叮嚀な便りをもらったことがあった。

しかし病も革まって自分の手では果せず、遺稿集になってしまったが、この整理と選択に尽された林和夫、望月達夫両氏の御苦労は

# 一つの提言

## 日本山岳会総会に思う

佐藤テル

毎年のことながらわが山岳会の総会の如く平穏無事、かつ物足らない集りはないと思う。特に今年はその感を深くしたのは私ひとりではあるまい。

総会はわれわれ会員にとって一年間の締くくりであると同時に、新しき年のスタートでもあるから、もう少しきりっとしてもよいと思う。いずれの団体の総会でも報告、議事、選挙と行われるが、役員、委員の選挙はもう少し一般会員がその選挙に直接あずかることが出来るし、議事の進行でも、わが山岳会の如く、議事法も用いず、「まあまあ」式のなれ合いではない。善良な会員のみと言うべきか、または無関心と言うべきか、議事の提案もなく、賛否の動議もなく、「異議なきものと認めます」とかで何事もスイスイと通るのか、通すのか、まるで強引な自民党を真似ているようなのは残念である。

前年度の報告でも形だけの賛成をとるより、質疑応答がもう少しあってもよいと考えられる。しかし、私にとって一番に不満なのは新理事、役員等の選挙の方法である。

なるほど総会の出席数その他は規約通りであるにしても、会員一人一人が納得のゆく選挙を行使しているのであろうか。私は今後は、出来れば各委員会とか部が役員達（会長、副会長を含め）の候補者を立て、その推薦理由を述べて理事会なり評議員会に提出する。候補者名とその理由を受けた方はこれを熱心かつ良心的に検討し、すくなくとも定員の二倍近い候補者を立て、総会にてわれわれ選挙権を有する者達が選択出来る説明をしてもらいたいと思う。定員数きっかりの候補者をならべ、入会年月と会員番号だけではその候補者の山歴、山岳界及び山岳会に対する貢献度が分らない。地方より上京した会員達にも納得のゆく説明をし、彼等の質問に答えてから投票を行うべきであり、しかも議事法を採用すれば、不賛成の人の意見も一般会員は聴けるかと思う。

もう一つ不可解なのは投票権の数え方である。仮りに一〇名しか会員のいない地方支部より三名出席をすれば3票の投票となる。しかし一〇〇名の会員を持つ支部から一名しか出席しなければその支部の投票数は一名となるような気がする。これを各支部の会員数に準じた投票権を記入したカードを与える方法をとれば、UIAAとほとんど同じであり、この方が「多数決と認めます」と拍手で決定するよりまだましであらう。

どうせ山岳会の総会は内輪の会であるから、そんなややこしい方法など採らず上層部に一任し「適当にやって下さい」式で何事も処理してもらうのなら規則も規約もいらないし、会費未納で脱会させられることもないであろう。

会員は会費を払う義務があると同様に、より良き役員を選ぶ義務があり、それを行使する権利もあると信ずる。

来年の総会では議事法を用い、出席者が選択の出来るような候補者の挙げ方をして欲しいものである。

どんなに時間がなくとも選挙は個人における嫁選び、婿探しと等しく重要なことであるから、これを省略して慣れ慣れの議決は止めてもらいたいものである。

大変だったろうと敬意を表する次第である。

お蔭をもって『北の山続編』が、年来の友坂本直行画伯の装幀で生れ、地下の彼が満足そうに口を曲げる顔が浮ぶ。

本文の三分の一を占める登山紀行や、登山史等をみると、やはり若き日の才気喚発の彼の姿を思い出すばかりだ。その他の小論や随想には、さすがに老成した静かな空気が漂い、昔の一本気の激しさは、どこにも見ることはできない。

私は、彼に一年後れの北大入学で、恵迪寮旅行部以来、いろいろな面で彼と一緒に多感な青春を過した。

四季を通じての山登りばかりではなく、札幌交響楽団では、彼はフレンチ・ホルンを、私はオーボエを吹いて一同を悩ませた。

また、大正十年以来、北大スキー部の有志で発行していた月刊誌「山とスキー」の第四年目の編輯は彼が担当し、第六年目は私が編輯人になってしまった。

北大山岳部の設立は、ほとんど彼の努力に負うものである。時折、先輩達と意見を戦わせる厳しさは、一見華奢に見えるあの風貌からは想像できぬものがあった。

卒業後、私は東京へ帰り、北海道との縁は遠くなり、彼が北大予科教授になったと聞いたときは、軍隊に召集されていた。

戦後始めて会ったとき、彼は中部日本新聞の論説委員をやっていたが、その後また北海道へ帰る便りを聞いた。

晩年彼が北大山の会の会長を引うけたときには私は副会長をやった。人間の生涯の初めと終りが、彼と一緒だったことに因縁めいたものを感じる。

北大山岳部も創立五十年を迎えることになり、OBも海外遠征隊を出そうじゃないかと、昭和四十八年夏、カナディアン・ロッキー中央部の、コロンビア氷原を中心に歩きまわる三五名の大部隊を繰り出した。

彼にも誘いをかけたが、折角ながら体調がよくないのでと手紙をもらい、その翌年から喉頭癌との苦闘が始まったのである。

昨年（昭和五十一年）九月、北大創基百年祭の機に合わせて、山岳部の五十周年祝賀会を開き、老若相集い、年齢を忘れて痛飲三更に及んだ。

そして半世紀とは、つくづく長い年月を意味するものと感嘆するとともに、彼の『北の山』の思想や精神は、北海道の山の暈滃を一層深めて、若い人達の胸の裡に生きているのを嬉しく思ったのである。

## 図書紹介

### ブラーヴァン著・井手貴夫訳
### 『グリンデルヴァルトの山案内人』
#### ――地名・人名の日本式表記に関連して――

宮下啓三

装幀も紙質も活字も挿画図版もすべてが好ましく心配りがゆきとどいて美しい。それも原色による派手で軽薄な美しさとはちがうこの本の地味な美しさは、いかにも内容にふさわしい。

まず第一に本書は、一八九八年に設立されたグリンデルヴァルトの山案内人組合が、その七十五周年を記念して一九七三年に刊行したものである。アルプスの登山史で数多くの歴史的な登行を実現させてきた先輩たちの業績を回顧しながら、けっして仲間うちだけの思い出話に終らせず、むしろスイス・アルプスの山岳開拓の歴史という大きな文化史的背景をデッサンし、そのかたわらで案内人の組織化の歴史をつづっている。つねに脇役であることを宿命づけられている案内人のもつべきモラルにも説きおよぶ。だから、スイス中央のユングフラウを中心とした限られた山域を活動の場とする一案内人組合のごく内輪の記念出版物であるのに、アルプス登山史の資料としても十分価値のある内容をもつ。著者はサミュエル・ブラーヴァン。

第二に、本書の訳書の出版がもっている友情にみちた背景にも価値がある。槇有恒氏のミッテルレギー山稜の初登攀をたすけた案内人たちの一人が本書の著者である。槇氏とブラーヴァンのあいだに芽生えたスイスと日本両国の岳人の友情ある関係をうけつぐ人であるからこそ、訳者の井手氏は本書を日本の読者に紹介する役割をみずからかって出られた。アルプスの山々との縁をもつようになった日本の岳人は、案内人たちの助力に感謝すべきものを多くもっている。そして彼らの歴史を知り、その意識のありようを感じとることがこの訳書をひもとく者の最大のよろこびとなる。良き訳者をえた原書の幸福さをも、読者は汲みとるべきであろう。

ところで、この訳書は私たちにアルプス関係の地名人名の表記法に対する関心をさそわずにはいない。訳者はシャモニーの名でなじみ深い土地をシャモニクスと表記するに至ったてんまつをあとがきに詳しく述べている。大学と学会と登山の三つの面で私の先輩にあたる井手氏は、訳業の進行中とおぼしい時期に、私にシャモニクスという発音の可能性についておずねになった。私には初耳だったが、井手氏は熟心な探索をされたのちに決然としてこの表記を採用された。この厄介な問題については、私はせいぜいフランスのミシュラン社のガイドブック『アルプス』八十三頁に「シャムニと発音せよ」とただし書きがあること、それ以外にはシャモニの発音を修正させる手がかりをどこにも見出していないことを書きそえてご参考に供するしかない。

シャモニクス問題は、外国の固有名詞の表記法についての真剣な検討を提起する。標準的発音をとるべきか、現地での呼称をとるか、それともいっそ通俗的な読み方をとるか。もしも井手氏がシャモニクスに対すると同じ厳密さをつらぬかれるなら、数ヵ所で言及されるベルンの教授の名はヴュスでなくてヴィースでなければならないと私は信じる。アガシーズホルンは、アガシの名と業績を知らない者が現地でおこなっている発音であろう。再三あらわれるロッタールは、もともとユングフラウが「銀の峰」とか「砂糖の山」とも呼ばれて純白のイメージをもったのに対して、雪より岩がまさってしかも暗くて恐ろしげな雰囲気をもつがために「赤い谷」と呼ばれた谷があったからこそ、原意に忠実であればロートタールでなくてはなるまい。フィンステラールホルンか、フィンスターアールホルンか。ラファーターか、ラーヴァーターか。疑問は尽きない。

井手氏がシャモニクスの呼称によって提供された問題を、とりあえず私は右の諸点の疑問を呈して井手氏ご自身に提供してご一考をわずらわしたく思う。固有名詞は私たちをつねに苦しめるが、この際にある程度の原則をもつことができるような討議の機会がえられれば幸いだと私は思う。

右の表記問題は、しかしながら、本書の価値と魅力をいささかも損なうものではない。興味深く有益な、ともすれば地味さのゆえに見過されてしまいそうな書物を訳出して下さったことに対して、私は井手氏に感謝の念を禁じえない。多くの岳人にこの訳書の有意義を知ってもらいたいと私は願っている。

昭和五十二年一月　茗渓堂刊
変型20×21cm、一〇二頁

## ●――図書紹介

### 『山を見る日』

川崎精雄著

前著『雪山・薮山』が出て八年後にこの第二著が世におくられた。著者は今年古稀の齢を迎えたので、今回の刊行にあたっては、その内容や構成について一段と工夫をこらしたことと想像する。その故もあってか、出来上った本書はまさに佳品と言ってはばからない。

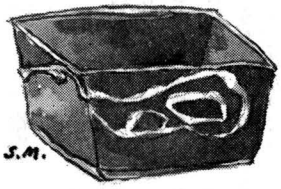
内容は随想と紀行に大別され、殆んど等量が夫々にあてられて、よくバランスがとれている。どちらかというと私は、山の文章では紀行を重視する方だが、著者の場合は随想のなかに特にすぐれたものが幾つかある。「雪の夜道」などは、この人ならではの佳篇と思う。著者は五十年に余る山登りの実践と、野尻抱影、向井潤吉、藤島敏男氏はじめ少なからぬすぐれた先輩知友に恵まれ、読書、音楽、絵画の観賞、さらには句作の修練といった並々ならぬ分厚い裏付けをもって、これらをものしているのだから、当然と言えばそれまでだが、併し誰にも真似られるものではあるまい。

紀行で取扱われている山々は、前著同様いまでもあまり人の行かない山や峠が多い。これもここ十年、著者の好みがどういう山へ向っているかを示すもので、私には特に興深い。山登りとしては、どれも肩をいからせたものではないが、著者が二十、三十台に激しい登山をやってきたことが処々に顔をのぞかせ、それが近頃の紀行にも奥行きを感じさせる。また、前者と異るのは随想・紀行・写真のいずれにも海外のものが含まれている点である。

俳句が四頁にわたって二十八句載せられているが、これも多くのなかから精選されたものと思う。「浮島を押して別れぬ沼の秋」を私は忘れることができない。

著者の手になる二十一葉の写真は、前著が製版上稍々失敗だったのに比べると格段に優れている。ブナの新緑（真昼岳）など、まさにうっとりするような一葉と言いたい。他に足立真一郎氏の「白馬岳」が口絵に添えられ、扉は菱科光順氏のカットで飾られている。

装幀は濃紺の布装で、角トジ、ヒラと背文字の題名は朱色、落ちついたなかに、ほのかなはなやぎを感じさせるのも、著者の好みであろうか。




私がJACで親交を結ぶようになった先輩友人は少なくないが、著者とも足繁く山歩きをする間柄となって、彼これ二十年に近い。それだけに本書の紹介者としてはむしろ適任と思わないが、製作の過程でまったくタッチすることがなかったので、極めて卒直な感想を認めた。本会の会員であるなしを問わず、多くの人々に読まれることを祈ってやまない。

A5判三四八頁　二九〇〇円
昭和五十二年一月十一日　茗渓堂刊（特装限定版発行の予定もある）

（望月達夫）

## ●――報告とお知らせ

### 木暮理太郎翁生没年の訂正
### ――第十五回木暮理太郎翁碑前懇親会報告――

岳聖、木暮理太郎翁の三十三回忌にあたる本年五月、なつかしいメンバーが今年も金山平にやって来た。

高田真哉様は金峯を越えて、山形不二男様は瑞牆山から。山菜を採りながら黒平からの甲府勢など。御遺族の美枝子様は、今年で三年連続の御出席。本会からは望月副会長、近藤信行評議員。生前木暮碑のため心血をそそがれた故神谷恭氏の御長男量平様、霧の旅会創立発起人の山崎金次郎様、木暮碑建立に専門的技術を駆使された松本熊次郎様。遠来の客に、仙台の高橋懸二様、山形の岡部みち子様、名古屋の川北仁様など。

五月十四日午後四時より、新緑の白樺林に囲まれた碑前に集った。地元を代表して石垣政雄氏が歓迎の辞を述べた。続いて望月副会長は、西会津の山で足をいためたが、日本の古い登山家の中で一番強い影響を受けている木暮先生に御無沙汰しているのが原因ではないかと思い馳せ参じたと語られた。

木暮美枝子様は、父がなくなって三十三年、今に至るまでこうして記念の集りをしていただけ、こんなうれしいことはない。父もさぞよろこんでいることと思う。

高橋憲二様は、『山の憶ひ出』で啓発された。旧制二高の卒業生の先生は、南蔵王の清渓小屋の看板を書かれ、現在も残っている。

このような記念感話があり、一同記念撮影のあと、高橋様のシネカメラにおさまった。

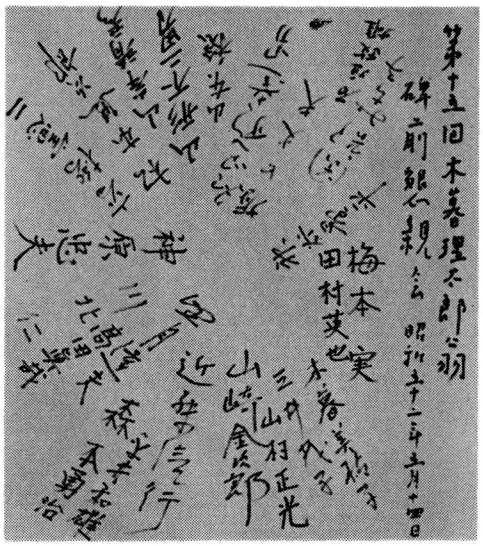
ついで、以前から問題になっていた、碑面にしるされている先生の生年月日、没年月日についてそれぞれ意見を出された。

レリーフに彫られている一八七四―一九四四は、一八七三が正当。経歴にある、明治七年十二月二十九日生れは、明治六年十二月七日が正しいこと。ちなみに十二月二十九日は小島烏水の誕生日である。

六年と七年との関係について美枝子様は次のように語られた。

母友枝は、明治十九年の戌年生れでこれは間違いありません。ながいこと父は母より一まわり上の戌年だといっておりましたが、ある時、本当は戌年ではなくて、酉年だと白状しました。二人は十三も年の違った夫婦だったのです。

また没年月日については、正面にある昭和十九年五月六日没は間違いで、裏面にある五月七日が正



木暮祭での寄せ書

当である。

整理して、木暮先生は、明治六年（一八七三年）十二月七日に生れ、昭和十九年（一九四四年）五月七日になくなられたことを全員で確認した次第である。

六時からは、有井館のランプの下に床を移して山菜料理に舌つづみをうった。コック長は玄人はだしの堀口丈夫君。平井和雄、石垣政雄、山本稔、山岸靖彦、岡部みち子、三井茂子の諸氏が腕をふるった。

メニューは次の通り。甲州名物煮貝（三井茂子氏差し入れ）、さんしょの若芽のつくだに（成沢正通氏差し入れ）、馬さし（本わさびそえ）、てんぷら（山うど、たらのめ、みねば、アスパラガス、わらび）、山うど（ごまみそ和え）、わらび（おひたし）、コゴミ（マヨネーズ和え）、みょうがたけ、あさつき（みそあえ）、たらのめ（ごまあえ）、山いも（もみのり）、きゃらぶき、こんにゃく（さしみ、本わさび）。

酒は例によって、甲斐駒ケ岳の麓の銘酒「七賢」、ビール、ウイスキーなど。本年の記念品はすこしおごって、沖縄の金城次郎氏作の赤絵のぐいのみであった。

最後は、有井館心づくしの手打ちそば。毎年好評だが、今回最高は四枚、他人の分まで平らげた豪の者もおった。

翌十五日、国際的な雨男、神原忠夫氏の予言適中、夜明けから雨が降り出した。仕方なくはやばやと車で下山となった。

ところが不思議、神原氏が去ると、雨はやみはじめ、甲州の地を離れたと思われる頃になると青空さえ見えてきたのには、残務整理者一同、驚いたり、おかしかったり、かくて会は無事に幕を閉じた。

（附記）過去、先生の御遺徳を慕って、御遺族の方々により、かたみの品々を碑のまわりに埋められた方がおられる。記して記念としたい。

君島久登氏、一柳兵象氏、神谷恭氏、村尾金二氏（昭和五十一年十月十五日、奥様の義子様が埋められた）。

（山村正光記）

## 山菜勉強会報告

六月一日(水)、午後六時三十分より八時三十分の二時間、「山菜記」の著者、片岡博氏をルームにお招きし山菜の勉強会をもちました。前日に新潟の方が持って来られたというたくさんの山菜を前にして、片岡氏撮影の六十枚のスライド一つ一つの説明を聞きました。参加者四十二名。（阪本伸一）

## 藤島敏男さんを偲ぶ会

去る五月二十五日の夜、港区六本木の国際文化会館において、藤島さんを偲ぶ会（世話人、島田巽、加藤泰安、織内信彦、望月達夫の各氏）が開かれた。日本山岳会を中心にして約六十名の出席者があり、司会は望月達夫氏。槇有恒、黒田正夫、松本重治、佐藤テル、交野武一、早川義郎各氏によって故人のユニークな人柄が語られ、笑いをさそわれることもしばしばであった。時には席をはなれ、思い思いに歓談を重ねた。

なお、紀子夫人を始めご遺族が出席され、最後にご子息の泰輔氏の謝辞があった。（横山厚夫）

## 総会後の各支部有志との親睦登山

四月二十三日(土)、通常総会後の晴れあがった日、新宿駅を出発、奥多摩の御岳へ向った。ケーブルで中腹まで登り、大岳山を往復する。春まっさかりのこの山は若葉が美しく、つつじが満開だった。夜、うつぼや荘で親睦会を開く。

今回の主旨は、支部の方たちにふだんひとかたならぬお世話をいただいている本部の者として、何かおかえしをしたいという気持でおこなったが、参加人数が少なく、当初の目的をはたすことができなかった。しかし、今後こうした企画を実行するうえでの基礎づくりという点では、おおいに成功したとみていいだろう。参加したすべての人たちが、その主旨に賛同し、今後ともよりよい親睦会をおこなってゆくという点で一致を

売場ご案内

最新入荷及び好評の本・報告書

✝報告書'76（長野県山岳協会イラン王国ダマバンド峰女子登山隊）1,000円　✝年報7（中央大学学友会体育連盟山岳部）3,500円
✝八が岳研究（豊島山岳会編）2,000円
✝1976 Report From Mt. Mckinley（広島山岳連明）1,000円　✝セントラル・ラホール地区トレッキングの記録－1975－（北里大学山岳部ムルキラ山群調査隊）720円　✝いろりばた－第55号－（南会津山の会）1,000円
✝淡彩画絵はがき－北海道の山・原野・花－（坂本直行）1集・2集各6枚1組300円
✝日高山脈－自然・記録・案内－（北大山の会編）2,400円

茗渓堂 <山の本の売場> お茶の水店三階
営業時間 平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

みたからだ。翌日、御岳駅で散会した。

出席者　山川（北海道支部）、北林（秋田支部）、河野、中、進藤、斎藤桂、中川、三渡、須浪、小原、福島

## ビール・パーティ

恒例のビール・パーティをおこないます。まだ残暑きびしいときです。みなさまお誘いあわせのうえ、ご来室ください。

八月二十日（土）午後4時より日本山岳会ルームにて（有料）

## 温泉に入って太郎に登ってつりをする会

**場所**　学習院大学日光光徳小屋
**日時**　九月十日（土）十一日（日）
**会費**　二八〇〇円

※青年懇談会では右記の要領の企画を立てました。ドイツとの交流登山の報告やUIAA青年集会の計画について等を語り合いたいと思います。

**連絡責任者**　絹川〇三―五〇二―〇四二一・高橋〇三―二六一―九七三一　（青年懇談会）

## 洋書目録完成のお知らせ

図書委員会

日本山岳会図書室の蔵書増加に伴い、目録の再収録を行い、昭和四十九年末に和書目録を発行し、引き続き洋書目録の作成作業を行っておりましたが、一部作業の中断等があり遅れておりましたが、このほど完成いたしました。

目録には約五百冊の蔵書が収録されており、図書の著者名、書名のいずれからも検索出来るように収録いたしました。

目録というものの性格からも、また資料を広く会員各位に活用していただくためにも、当初は、無料で配布する予定で、その予算を計上しておりました。ところが、昨今の諸物価の高騰と共に、収録作業の遅延等があり、予算をはるかにオーバーしてしまいました。まことに残念な状況ではございますが、このような事情のため、会員各位に一部実費負担していただきまして、希望者のみにお送りすることになりました。ご希望の方は実費および郵便料として、一部三五〇円（切手代用可）同封の上、事務局までお申し込み下さいますようお願いいたします。

なお、本洋書目録の作成は岩渕泰郎氏の多大な労力により完成いたしました。　（河野悠二）

## 〔訂正とお詫び〕

先般会員各位へ発送したルーム基金募集の書状中、海野治良氏が海部と、また小倉董子さんが董子と、村木潤次郎氏が村上と、芳野赳夫氏が赴夫と誤まっておりました。訂正かたがた深くお詫びいたします。（望月）

・自然保護情報・

# ブナの原生林を守ろう

## ――和賀岳（一四四〇メートル）の場合――

高橋亭夫

和賀岳と申しあげても、山のガイドブックにもほとんどのっておりませんし御存知ない方が多いと思います。

この山は奥羽山脈の岩手、秋田両県の県境にまたがり、岩手県の西側ほぼ中央の県境になっています。地図によっては真昼山地とあり、真昼岳（一〇六〇メートル）の北約一五キロにあって阿弥陀岳と記してあるものもあります。

このように真昼岳よりも高く、またこのあたりでは一番高い山でありながら真昼山地の名前が出て来るのは、和賀岳は麓の村落からはあまりよくその姿が見られず、積雪期には四～五メートルを越す豪雪におおわれまた無雪期には登山道のない、まったくの原生林のため、けだものの安住の地であり、人間が足を踏込むことが非常に困難な奥の深山だからでした。残雪期の堅雪に地元のマタギしか入れぬ山であり、現在でもある地点には熊おとし（わなをかけて熊を落し入れる道具）の跡が残っています。

この和賀岳とは反対に、真昼岳は昔から山岳信仰の山として親しまれ、地元の人達から知られて来ました。

和賀岳は現在、岩手県側からはよく整備されたコースがなく、したがって橋などもなく、数回川を渡らねばならず、もちろん山小屋などはありません。

秋田県側は岩手県側に比較してよくコースが整備されており、麓には避難小屋が一つあります。

和賀岳の北約五キロには、標高一三七五メートルの朝日岳があり、この朝日岳には完全な登山道がなく、わずかな踏跡の残る頂上までのコースが一本あるのみです。登山者が非常に少なく、専門的分野ではまったく未知の多いきわめて貴重な地域だと思います。

この和賀岳及び朝日岳一帯は主にブナの原生林であり、この道の権威者によれば本邦一のブナの原生林と言っております。

ところが、この広大なブナの原生林も日ごとに伐採面積が増して行き、特に秋田県側がひどく、奥羽山脈の稜線である県境近くまでせまり、かなり乱伐されてきました。

環境庁では、このブナの原生林を国の財産とし幾多の貴重な国民の資産を後世に残すため、山岳では始めての原生自然環境保全地域（現在A・南硫黄島S50・5・17指定、B・屋久島S50・5・17指定、C・大井川源流S51・3・22指定）候補地に上げておりますが、この地域は国有林で林野庁の保安林に指定されているためこの保安林の指定解除が必要であり、林野庁が指定解除に難色を示しているので原生自然環境保全地域の指定が難行しております。

この指定には地元村長自身も賛成されており、また地元住民で林業に従事している人達もあるので地元住民を柱にして生活と自然保護の両面を考えての運動が急務であり、全国の岳兄各位の御協力により一日も早く指定され、美しい自然をいつまでも、そのまま子孫にのこすのが私たち現代人の最大の責務であると思います。

# 会務報告

5月理事会
5月16日午後6時30分、本会ルーム

▽出席者　西堀会長、望月、折井各副会長、宮下、高遠、山本、中川、橋本、大森久、皆川、鈴木、大森薫、黒石、越田、田村、牧野内、嵯峨野各理事、飯野監事、山崎、金坂、小原各評議員

▽委任　小倉、倉知、浅田各理事、浜野、松丸各評議員

新役員による最初の理事会で会長あいさつで開会

▽議案
・各理事の分担について（望月）
総務＝宮下秀樹、高遠宏　財務＝橋本　清　寄贈品整理＝黒石　恒　承認
・常務理事の選任　（望月）
宮下、高遠、山本、小倉、中川、橋本、大森久　承認
・常任評議員について
総会後の評議会で決定
浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原
・ルーム購入資金募金について　（望月）
募金金額等詳細を委員会で検討のこと　了承

▽報告その他
・ウェストン祭出席について
会長、副会長出席　（宮下）
・映画と講演（集会委員会）　（中川）
7月13日（水）千代田公会堂
映画と西堀会長の講演　了承
・マナスル登頂二〇周年パーティー　5月9日80数名参加盛会
インド登山財団サリン氏来席　（鈴木）
・自然保護
6月11日～12日大台ガ原現地視察、地元と懇談
・山渓山岳賞が三田幸夫氏に、山渓登攀賞がナンダ・デヴィ登山隊に、それぞれ贈られる。　（宮下）
・山岳研究所開所　5月14日（土）より　（小倉）
・指導　（嵯峨野）
5月21日～23日岳沢講習会
11月下旬　富士山、他に山スキーを予定
・高所登山　（田村）
ガルワール登山準備中、9月頃出発予定
「ヒマラヤ研究」出版予定、今夏
・集会　（中川）
今後の予定
5月20日学生部ドウナギリ報告（ルーム）　6月1日山菜講習会（片岡博氏）（ルーム）　6月11日～12日浅草岳山行　7月13日映画会　9月～10月山岳写真講習会　11月バザー、会員会議　12月もちつき大会　1月八方尾根スキー　3月オリエンテーション　12月3日（土）年次晩餐会
・遭難対策　（橋本）
金坂氏を中心にナダレ勉強会を予定
・青年懇談会　（橋本）
日独交流10名派遣予定、準備中
日中友好交換登山計画中
・図書　（越田）
年中行事例年通り
・山日記　（皆川）
11月発行目標に編集

## ルーム日誌（52年5月）

9日（月）集会委員会
11日（水）指導委員会
13日（金）図書委員会
14日（土）IMF・サリン氏来日パーティー
16日（月）理事会
17日（火）指導委員会
18日（水）三水会
19日（木）三菱銀行山岳部ミーティング
20日（金）第三五五回小集会、「ドウナギリ北稜登頂報告会」
23日（月）山岳編集委員会、集会委員会
24日（火）婦人懇談会
25日（水）山研委員会
26日（木）募金委員会
27日（金）自然保護委員会
30日（月）集会委員会
31日（火）図書委員会

今月の来室者三九六名

**会員異動**（52・5）

**退会者**
三三九四　小池　義文（52・3・31）
五二三九　藤原　武夫（52・5・19）

**名儀変更者**
七九九三　増田　賢二（高井）

**除籍取消**
四七八四　島田　興史朗
四四一四　神戸大学山岳部
五〇九六　東京女子大学体育会山行会

**物故者**
七七九二　近藤　芳春（52・5・11）
九三七　中原　万次郎（52・5・14）
七九九三　増田　賢二（その他）
七七六四　藪田　晴重（その他）
七三六二　村尾　統一（海外）
七〇七六　篠原　義文（東京）
六〇七二　新貝　勲（福岡）
六四八六　太田　五雄（福岡）
五〇〇三　岡部　みち子（山形）

**支部変更**

## お知らせ

### 上高地山研夏山シーズン！

利用申込みはお早目に

会員各位のご努力により、おかげさまで、山研運営も軌道に乗りはじめました。七、八月の利用申し込みはできるだけお早目にお願いします。

昨年忘年会のチャリティでいただきました、四一、五七〇円は、管理人室の除湿器を購入させていただきました。お礼と共にご報告いたします。

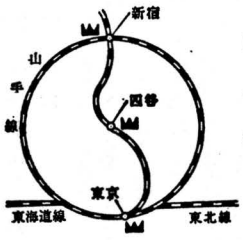
（山研運営委員会　小倉）

＊　＊　＊

昭和五十二年七月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西錦司
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

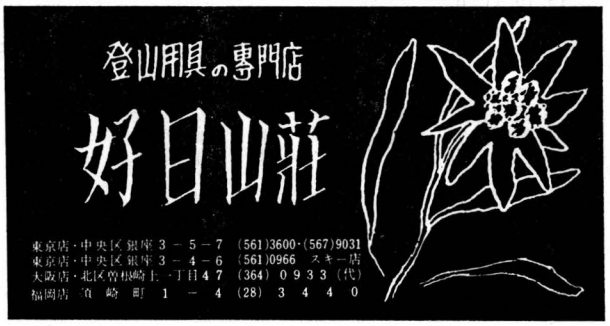
登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736
●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店
山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718




## 山の本

近刊
### ナンダ・デヴィ縦走
日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊編——東西峰の縦走を完遂し、世界の登山史上に輝かしい一頁を記した、日印合同登山隊の記録。

第二版
### 日高山脈
▲自然・記録・案内▼
北大山の会編　A五判三六二頁　定価二四〇〇円
急速に拓かれつつある日高山脈は往時のおもかげをじゅうぶんに残した日本で唯一の地域である。本書はながい年月にわたって記録され調査した、日高の全容を収めたもので、とくに案内については他に例を見ない。
内容　I日高山脈の自然　II日高山脈登攀史　III日高山脈の記録　IV日高登山の手引き　V登山コース概念図　案内図／カット一原有徳

### 山日記
一九七七年版
日本山岳会編　A六ポケット判　定価九五〇円
『山日記』は、できるだけ広い範囲の登山者に利用して頂くよう編纂され、殊に若い世代の人々に一人でも多く活用して貰うよう企画されています。夏山シーズンに山党同志の贈物としてご利用下さい。プレゼントカード付

### 淡彩画絵はがき
▲北海道の山・原野・花▼
坂本直行　I集・2集　各6枚一組三〇〇円
好評のI集に続き、2集ができました。
I集＝桐の実・初冬の中部日高・むしゃりんどう・まゆみ・おおめしだ・大雪山黒岳
2集＝えぞしゃくなげ・はまぼうふうの種・初冬の利尻富士・えぞふうろう・ふきのとう・五月のトラムウシ山

茗渓堂　■出版目録送呈　■お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。
〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1　電話03-291-9442 振替東京8-24723